

# 小田原史談

第50号

談会 小田原史談会  
原内3-22内  
小田原市文化館  
発行所 小田原市  
小田原郷

## 足柄山の五仙人

井上英一

文中、鹿山とあるは現在の  
の栢山の事の様です。

それ故この地方に關係が  
ありますので

「漸門」十月号に掲載され  
たものを筆者（北原博士）  
の了解を得て此処に掲げま  
した。

相模国小田原在に鹿山とい  
う村里がある、そこに水原  
文五郎という獵師がいた。

文五郎の父は水原文弥長信  
といて北条氏康に仕へた  
武士であった。

ある年の冬、雪の日であつ  
たが、文五郎は足柄山へ獵  
に行った。獲物を求めてだ  
んだん登って行くと、頂上  
のあたりで人の話し声がす  
る、この人里を離れた吹雪  
の山頂で何事だろうと怪し  
く思い、そっと足音を忍ば

せて人声のする方へ近づい  
て行き、物かげからうかが  
うと、五人の老人が雪が山  
頂の強風に乘って吹きつけ  
て来るのも知らぬ顔でニコ  
ニコと楽しく打ち興じて語  
り合っている様子、いよいよ  
不審に思つて耳を澄まし

ているとどうやら山田仁左  
衛門（山田長政、江戸時代  
前期の人、シャムの日本人  
町の頭領となり、国王を助  
けて戦功をたて、王女と結  
婚して最初の官位を得たが

六昆「リゴール」の太守に  
封ぜられてから戦つて負傷  
して死んだと伝へらるる）の  
シャムに於ける戦争の話の  
ようであったが、途中から  
聞きだした話なので何のこ  
とかどうもよく判らない、

そのうち上座にいる老人が  
「兎に角吾々の性（本質、  
天命）は天地の規律（道）  
に従つて寿命を長く保ち、  
人間界の為す所を助けて正  
道（正とは一と止の合字、  
一に止まるとは大生命と一  
体化すること、それが正で  
ある道とは首との合字、  
はじめがすすむ、太初を生  
々化々の働きが道である）  
に導き、天然を楽しむのが  
第一の事だ、皆さんも同意  
見だろう」と言い出した。

すると其の左にいた老人が  
今言った上坐の老人に『正  
覚院殿は本年何歳になられ  
ますか』と問うた、すると  
『私は十づつ九返りに二つ  
足りません』と答へた。こ  
れは九十に二つ足りない、  
八十八才ということをしや  
れて答へたのである。すると  
と重ねて『どういう行をし  
てその長寿を得られました  
か』と問うと、雪の中で温  
かそうにニコ／＼しながら

『満善坊の御質問とあつて  
はお答えしないわけにはゆ  
きません、それで私の  
長寿法を語りますから、皆  
さんの方法も交代して話し  
て下さいよ』といて正覚  
院と呼ばれた老人が語り出  
したのは『私は十四、五歳  
の時から煮たり焼いたりし  
たものは一切食べないよう  
にした上に穀物もなるべく  
遠ざけて果物を食べるよう  
にしました。然しその果物  
も一日一回だけで、その他  
は天地の気を食べました。  
それは晴天の朝夕、山野に  
出てまづ体の悪気を吐き出  
して腹の中に満たすのです  
（服気法、吐納法を行すの  
こと）こんなふうには気を食  
しておれば一日中空腹をお  
ぼえず平気でいられますが  
全然果物を食べないでいて  
は肉体的方が少し衰弱を感  
じますので、その感じの起  
らない程度に果物をとるわ  
けです。其の外にすすむ行と  
いっては毎日冷水を浴びる  
ことだけです。こういう訳  
で身体がいつも新鮮清浄で  
ありますと病根も身に宿る  
ことがなく、心は常に快調  
です』と語つて其の正面に  
対坐している人に向つて『

私のこんな具合ですが十  
全院の長寿法はどのような  
ものでしょう。ひとつ御伺  
いしたいものです』と指名  
した。すると十全院という  
老人が言うには『私は本年  
で十づつ八返りになお八つ  
余りました』と、これも八  
十八ということをしやれて  
言つてから語るには『私は  
幼少の頃から体は至つて健  
全だったので五十すぎまで  
医薬の味を知らなかつたの  
です。処が五十四の時どう  
も気分が悪かつたので人に  
すすめられて一度医者に薬  
をもらつたのです。ところが  
その薬を一服飲んで翌朝  
起き出してみると心気がと  
ても爽快で前日の苦しみは  
あとかたもありません。

あまりすばらしい薬だと思  
いましたので、その医者に  
あれはどういう薬でしょう  
と尋ねましたので、その医者がい  
うには、あなたには元來神  
仙の相がある。しかしなが  
ら天食を用いられないので  
俗の境涯から脱れられない  
のです。そこで人食を減じ  
て天食に入れる人になられ  
ます。薬の中味は三昧でこ  
れこれの物です。との話。  
そこで天食、人食とおし  
やるがそれは何の事ですか  
と尋ねると、医者の答えは  
人食とは火食物、天食とは  
不火食物です。今後はこの  
天食人食を半々にして食べ  
るようにし、だん／＼と人  
食即ち火食物の方を遠ざけて  
ゆきなさい。そうすればか  
りに仙境に入る事は出来な  
かつたにしても生涯の病根  
を断つことは出来ずとの  
話でした。それからその言  
葉を守つて、終りはとうと  
う火食を断つてしまいまし  
た。

私の今日あるのは全くその  
医者の言葉に従つたお蔭で  
あつて、私は其の医者の持  
つてある術の半分のもの知  
りませぬ、その医者という  
のは、それ、その次席に坐  
つていらっしゃる養徳医師  
のことです。だから私の経  
験以上の事は、この養徳医  
師が語つてくださるでしょ  
う』と語り、そこで養徳医  
師と呼ばれる老人が語り出  
した。『私は今年で百十歳  
です。私は十二歳の時江戸  
において、幕府の侍医につ  
いて医学を修め、後に日本橋  
の辺で開業しました。そし  
て毎日やってくる患者を診

断致しますと、生れつき体の弱いために病むというものもありましたが、其の多くは体に合わぬ摂生をしたために病根を得た者が殆んどです。それでは摂生が体に合わぬとはどんな事かと言いますと、それには三つの種類があつて一は労働が体に相応せぬために病根を起すもの、二は食力と体力が平均しないために体をこわす者、三は天食と人食が化合せぬために病を発する者です。大体三種類としてこの内一のスレスや過勞二の食毒、過食からくる障害の類は凡庸な医者では理解も応用も出来ません。そこに考えが及ばないので、そも、我が国の神代に於ては、衣食という事はありました。が料理などいうことは甚だ少なかった。それは天食が多くして火食が少なかつたからです。ところが人の口がだん／＼人工的に化粧した美味を覚えるにしがたが、人食をほしがり天食を忘れる傾向になつて行き、遂には人命を縮めるに至つたのです。然しながら、今日に至つては習い性となつたという諺の通りで人食になれてしまつた世人は

一日でも人食なくしては暮せなくなつて仕舞いました。処が十全院のような生れつき頑丈な人間が人食の美味ばかり摂つて暮しているに肉体の方の力ばかり盛んになつて心気は反対に衰弱して行く。所謂肉多氣少の状態に陥つて遂に病根となるに至ります。これ即ち天食と人食の調和を失つたためです。こういうわけで以前に十全院に天食を用いたならば身体の健全を得る事もとより、神仙の境地にも入れようと誘導したわけですが、ところが十全院を誘導した私の方が、十全院より神仙の境地に入ることが反つて遅くなつたのです。それは何かと言いますと、私の性格(心身)が生れつき健全でなかつたからです。私は医師の上から神仙の境地に入る原理は知つていましたが、どんな体格になつたか、具体的なエピソードに接するまでは私に適用すべき実際の手段を発見することが出来なかつたわけですから、それがたまたま十全院を診察して大いに悟る所がありました。

土台つくりのお手本が現れたわけですから、そこで其のお手本に近づくために、私の心身に合う方法を苦心して案出し、清冷な庭園に出ては体力に適した石をもて遊ぶこと数回、汗ばむを以て度として一年余り続けまして、先づ予想した通りの心身を得ましたけれど、生れつき神仙の骨相を備へていないために、其の境地に近づきは、しましたが未だ俗人から脱け出す事が出来ません。そこで薬草を考えて、其の上で天食の度合と人食の度合を較べて日常正食を心掛けたら、だん／＼飛行の出来る自分であると言ふ事が判つて来、とうとう神仙界に入れるようになったのです」と語る。

この時山上の杉の古木の梢に、笛の声のような風の音が起つた。何事だろうと怪んで文五郎が腰を転じて梢の上を見たが何も見えない。その目を下に戻して見れば不思議や、五老はこの一瞬の間に姿を消してしまつた影もない。あちこち見廻し、物かげから出て五老の行方を求めても雲ばかり、フト、手に持

### お知らせ

#### 久野の歴史第三集

久野の歴史第三集が刊行された。

久野公民館、久野史談会共同で出している久野の歴史は、こんどで第三集になるが、第三集は、史跡と文化財編で、全頁シャシをもつて史跡と文化財を紹介している。弾誓上人作正観

#### 初詣 二 案内

正月もすぐ目の前にきております。小田原付近で、正月の初詣に、にぎわう神社等を、ご案内致します。箱根神社

むかしは箱根権現と呼ばれて、東海地方のなかでも屈指の名社であつた。その歴史は古く、社伝によれば紀元前五世紀に創建されたといわれ、奈良時代の終り万巻上人が箱根三所権現に

帰つてきたが妻に聞いてみると、暫くの間、五老の話を立ち聞きしただけだと思つていたので、はや三日間をすぎたのであつた。

赤木柄短刀(いずれも重文)などは宝物殿に取められ、拝観できるようにする。(箱根)

大雄山農樂寺(道了尊) 応永元年了庵難明禪師の開創したもので、寺の中に了庵禪師の弟子で、禪師が永眠した翌日、長く山門鎮護の大願を誓つて身を隠したという道了大薩垂をまつてある。俗に道了尊と呼ばれて参詣人が多く、参籠のための設備もある。末寺は四干といわれる大寺院で近年までは三十余の建築物があつたが、たびたびの火災で焼失し、その後伊藤忠太の設計で主要伽藍は再建された。本堂には十一面観音を安置し、妙覺宝殿には道了大薩垂と大小の天狗をまつてある。(南足柄)

音はカラ、史蹟幻庵やしきの庭園、果重文指定申請中の釈迦三尊、古墳群や住居跡といった多彩なものだが、殊に史跡めぐりハイイクの解説などあつて、ぜひ歴史に置きたい郷土史の一つ。定価、一五〇円。郷土文化館で取次いでいます。

天下泰平を祈願してから關東の総鎮守として、源頼朝をはじめ武將たちに尊崇された。社殿は木造銅板ぶき朱塗の権現造で昭和十一年に改築したもの、境内には杉の古木がうっそうと茂り木ノ間に光る湖の色が美しい。祭神は天津ニ杵尊・木華開耶姫尊・天津彦火火出見尊で社室の箱根権現縁起絵巻・万巻上人自作の像

寒川神社 延喜式にのつている古社で寒川比古命・寒川比女命を祭つてある。古くは相模國一ノ宮として名高く、武將の崇敬が厚かつたという(茅ヶ崎)

高麗神社 高麗山にある。祭神は神皇産靈尊、ニ杵尊で、応神天皇、神宮皇后を合祀してある。かつては高麗寺として笑えた。(大磯)

# 旧足柄下郡における寺小屋雑考

野 頼 徳 治

一、はしがき 日本の教育に深い関心を示す海外の教育研究者の多くは、一つの共通した偏見をもっているようである。それは日本教育の近代化の成功は先進欧米諸国の教育を巧妙に模倣移植したからに外ならぬとの考えである。このことは一面の真理をもつが、忘れてならぬのは、こうした撰取を可能ならしめたものは日本が古来から蓄積してきた教育的エネルギーであったこと、維新を遡る遙か以前から教育に対する特別な尊敬の念とそれを追求して止まぬ精神とが広く深く国民層の中に根を下していた。ことに江戸時代に入ると、庶民階級抬頭の気運とともに教育は庶民の間に広く行なわれた。寺小屋が大いに普及したのは化政時代から明治初年にかけてのことである。その消長は庶民階級の勢力の拡大とよく対応している。

これらの寺小屋は、明治維新の变革を経て存続されてきたのみでなく、近代化の新しい情勢に対応して教育を進めるための企画も立てていたと思われる。明治の先覚者は、こうした寺小屋や藩学、郷学などを掌握して学制による統轄をしようとしたわけである。

本県教育センターが九ヶ年計画で近世以降の教育ならびにこれを支える政治・産業・民俗・文化に関する資料を収集し、それらの客観的解析にもとづいて本県教育の発展過程を明確にしようとしており、わたしも、その資料調査委員の一人として、これを叙述し刊行をしようとしてきた。たまたま清水翁より寄稿を依頼されるままに手がけている標記テーマで実情の一端をご報告し、ご批評を得たいと思う。

二、その状況  
1、開設した寺の数 本県宗教法人名簿に掲載の一九六か寺で寺小屋開設の明かなのはミナニ寺。開設されたと思われるもの六か寺を

数える、火災、地震、洪水などによって貴重な資料の散逸が著しく、資料の不足をかこつものである。  
即ち旧足柄下郡（現小田原市と足柄下郡）内で寺小屋開設の寺は、福田寺、宝屋開設の寺は、福田寺、宝

金剛寺、宝寿寺、新光明寺、東学寺、正心寺、宗繁寺、寿昌寺、眼蔵寺、福泉寺、香林寺、昌満寺、瑞雲寺、正蓮寺、妙円寺、本光寺、蓮華寺、量寛院、大蓮寺、源長寺、鎮雲寺、宝珠院、常泉院、城願寺、萬門寺、英潮院、真鶴常泉寺、万福寺、了善寺、守源寺、東光庵をあげ得る。この中で東

光庵は先きの名簿にはない（明治初年の廃仏棄釈でとりこわし）が、箱根声の湯にかつてあった寺院で化政のころから寺子を集めて成果を挙げている。寺子出身で英学者とし、早大教授をした勝俣鏡吉郎氏や、鹿鳴館時代の洋服を創作したその姉某がある。  
2、名称 荻窪の寿昌寺は寿昌寺教習所と称し明か

あるが、他は天災地変などによる資料散逸で不明であるが、教習所と称したものが多くと思われる。  
3、教科内容 教科は手習いが中心であった。書体はすべて御家流のようて習字の手法は同時に説方・作文・修身の用を務めた。先ず平仮名・片仮名・十千・十二支・国尽の類から始め、三字経・実語教・童子経・孝経・もろもろの往来物を教えられた。往来物の典型的なものは、庭訓往来・體身往来・家宝往来・消息往来・百姓往来・商売往来・忠臣往来・女今川・女大和といったものである。量寛院（板橋）のように天保年間より国学を教えたとする明かな事例もあるが、前述の東光庵に化政のころ加茂真淵などの文人墨客が多く遊び、東海道沿いの旧足柄下郡の寺小屋の教育に国学が強く滲透したであろうことが強く推測に難くない。また算術の教科書としては塵劫記が普通であったようである。これと類似のものに改算智恵袋がある。算術はすべて珠算で加減乗除、比例の一通りを練習して開平開立をもつて最高としたようである。

4、寺子の年令 六才から十三才ころまでが普通であるが年長のものを収容したものも、かなりある。別に学年の制があるわけではなく課程の定めもないのであるから、修業年限は区々であったと思われる。寿昌寺教習所は二十才前後までを収容したといわれる。漢文を教えたものもかなりあるようて光明寺では十八史略を教えたことが明かである。

5、師匠と開廃業 師匠の身分は僧侶が最も多く武士・神官・農民などの出身で師匠となったものも多く、異色なのは小台の蓮乗寺寺小屋の場合に、小田原藩主の娘の大久保えいが師匠として活動していることである。開廃業の年限の明かなものは極めて少ないが、文久・嘉永・慶応年間に始まり明治初年まで続いたものが多く、師匠もその一代限りであった。勿論二代三代と続いて寺子の教育をした例もある。

6、束脩 資料の不足で定かではないが、束脩として謝金を納めたものに量寛院米麦などの品物を納めたものに広済寺、全くの無報酬のものに光明寺、宝金剛寺などがある。

7、寺子の机 天神机と称する一人用のものを入学のとき、寺子は文庫とともに携えていき、師匠の居室の一部においた。昨秋、箱根宮城野の勝俣常次郎宅でその実物を見ることができ、これは写真に収めたが、そのほとんどは燃料として使われて見ることはできない。

8、指導法 師匠は室の正面に座を古め、寺子は、その前面に列をなして字を習う。読み方、算術の教授には一人ずつ師匠の前に出る寺子が代教にあつたようだったものもある。一般に年長のものもある。成績の優秀なものが師匠を助けて寺子を教授したようて、この点は英国のモントリアルシステムに似ている。

師弟の關係は、甚だ密接で、よく人格による感化がなされたと思われる。大抵の師匠は寺子を愛し、寺子は七尺退いて師の影を踏まずのことはどおり師匠を尊敬して、両者は美しい恩義の關係で結ばれていたようである。賞罰はよく行な

われ、賞品には筆・紙・墨が多かったようである。罰の種類としては、留置・鞭撻・直立・叱責・訓戒・机を背負わせるなど種々あったようで、今日の教育現場に比べると、余程きびしい訓育法が採用されたと思われる。バラモンの教育法に淵源するのであろうか。

三、むすび 以上、標題のように、旧足柄下郡における寺小屋教育について雑考をしたわけであるが、明治五年の学制発布という、いわば日本の教育の遷移点にたつて庶民のもり上がる教育への愛情がどのように官制の小学校の組織形態に移行していったか、研究はこれからの問題である。しかし、天災地変による資料の消失、あるいは散逸の傷手は大きく、今は、筆塚等の分析を手がけている。手許に箱根町箱根の万福寺所蔵の過去帳に記載されている

筆塚の文章をご紹介したい。「超勝院智眼、嘉永七年十二月二十七日卒す。当山十二世現住、寿令七十六にて往生、即ち生園、大和郡山藩の中、武藤半太夫の男、然るに、幼年にして出家す。即ち当山中興なり。任職在位三十余年、その中筆子等二〇〇余人、実子、男子三人、女子一人、往生のみぎり、実に苦痛なし。」と。この筆塚は、昭和五年十一月二十五日の豆相地震に際し、鞍馬山腹の山津波に吞まれ麓より押し出され埋没しており、以前の寺も地下三米のところに埋没している。

なお、この拙い研究にあたり、小田原市・下郡の各寺院と任職にアンケートをお願いしたり、面接ご教示を賜わったことに対し、深甚の謝意を表します。(仙石原中学校長)

たとお(墨紙)の中より

お触れ書

清水 専吉 郎

大正十二年の関東大地震に家蔵ともに焼失し幸じて大切な古文書の大部分も鳥

有に歸し年月を経て先年ふと「たとお」墨紙、古紙を張り合せて物を包むか又は敷物とする。その敷物の中



おふれ書文書

前書之通被仰出候間小前店借之もの共迄不減可相触候此段申達候 以上

より此古書を見付け出したるに依り其写真と共に掲ぐ右於支聞

者番紙血判被仰付候事

覚

一、町中松鋸三用候候松木之儀松槍者不相成候松を相用真松者不相成旨文化六巳年相触置候通心得違之者無之様可致候

右之趣町中不洩様可相触候 以上

町方御役所 卯十二月廿八日 年寄 当番

町年寄 十二月廿八日 清水伊十郎

窓町

因に文化六年 巳年 一八〇九年

文政二年 卯年 一八一九 幕府各砲台試射

文政五年 二宮尊徳登用 天保二年 卯年 一八三一 全国の総石高調

査 朱金銀改鋳 天保十四年 卯年 一八四三 海防令、江川 垣庵近海巡視

編集余滴

安政二年 卯年 一八五五 ベルリ来る 幕府神奈川条約締結の中 年 慶応三年 卯年 一八六七 大政奉還 此中のどの卯年に当るか、千支の干があらば判明する

も惜しき事なり、江戸末期当時の資源愛護と節約ぶりが小田原宿の正月松飾へも及ぼせる風潮が偲ばれる。「たとお」に限らず壁張りや屏風、唐紙などに古文書が応々にして張りまぜたるあり注意したきものなり。

▽昭和四十二年も十日を余すばかりとなった。ことしの史談会は手前ぼめではないが、可成り充実していたと思う。もともと来年三月までが四十二年度だが……。

▽夏からでも、伊豆山木遺跡、江川家の見学、甲州跡の寺々をたづねて、ぶどう狩り。(立木東導) 乙女峠がトンネル、御坂峠越えがトンネル、相模と甲斐が急に近くなってこれからは、大いにこのルートは活用されるだろう。

▽この史跡めぐりについては、次号に清水専吉郎氏がお得意の短歌の数々を添えて詳報されるはず。▽十一月に入ってから、市内史跡めぐりは谷津方面中野先生の御東導で、各

寺々や神社、旧家をたづねて現地できく史談は又格別。谷津は十字板橋について史跡の宝庫、一日ではもったいないコース

▽来春は、幹部の抱負では一泊で埼玉県下の北条氏関係史蹟をぜひやり度いそれに出たら、同好の士だけで、京都奈良へ二泊三日ぐらいいの旅したら、という意見もある。大いに見聞をひろめ郷土発展への一助となればもったいの幸い。

▽五十号当番の編集子からひとこと。切角たくさんの原稿をいたゞいたが、載せ切れませんでしたので、新年号を増員して皆さんの御期待にそうようにすることにしました。なお、原稿には、書き出しについて、表題を何行かあけるとか、句読点は必ず一字あけるとかしてほしいと思いましたが。誰が編集に当たっても同じ苦労をかさねますから。

小田原史談總括編

昭和四十五年一月十日印刷

昭和四十五年一月二十日發行

發行者 小田原史談會

發行所 小田原市城内三番二十二号

小田原市郷土文化館内

小田原史談會

印刷所 小田原市栄町一ノ一〇ノ三

有限会社 孔芸社

電話 小田原〇九二三五

